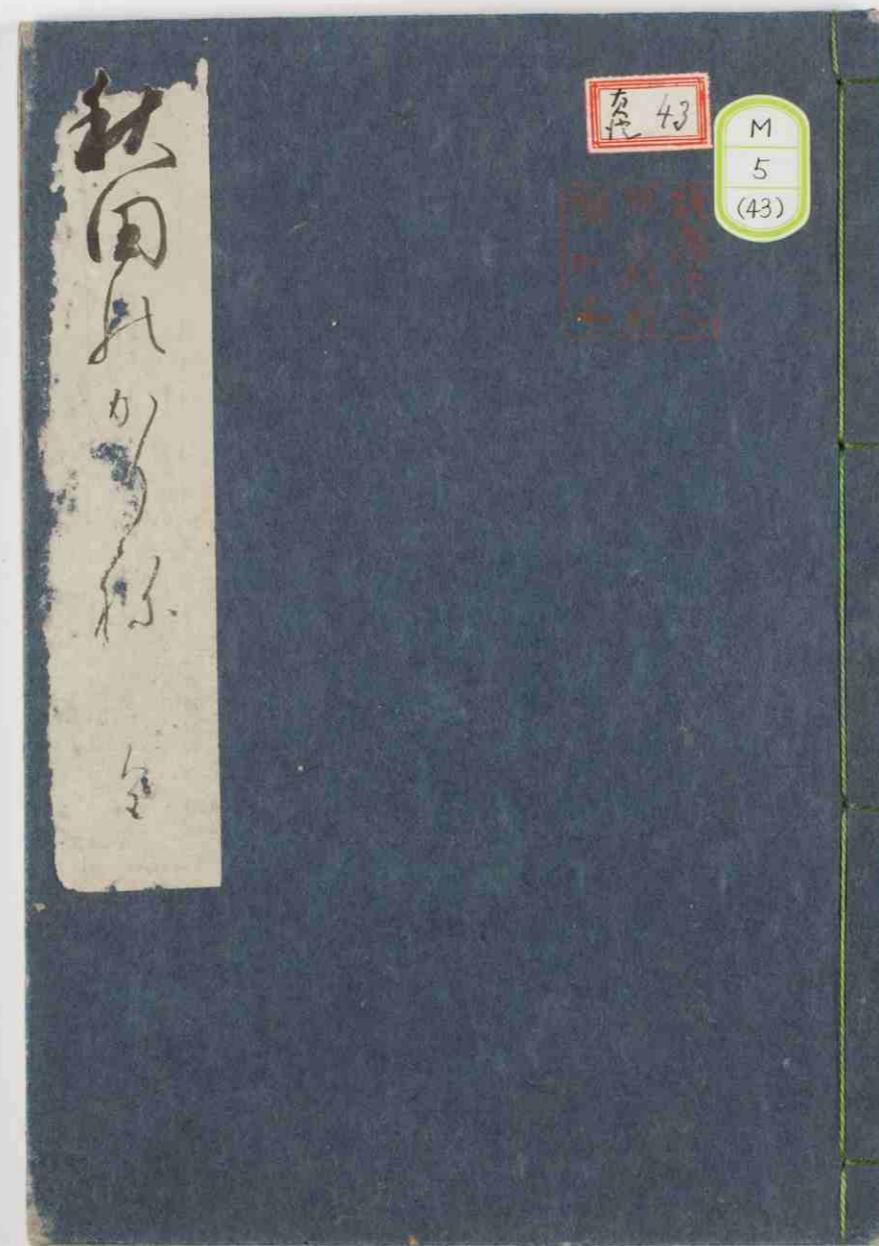
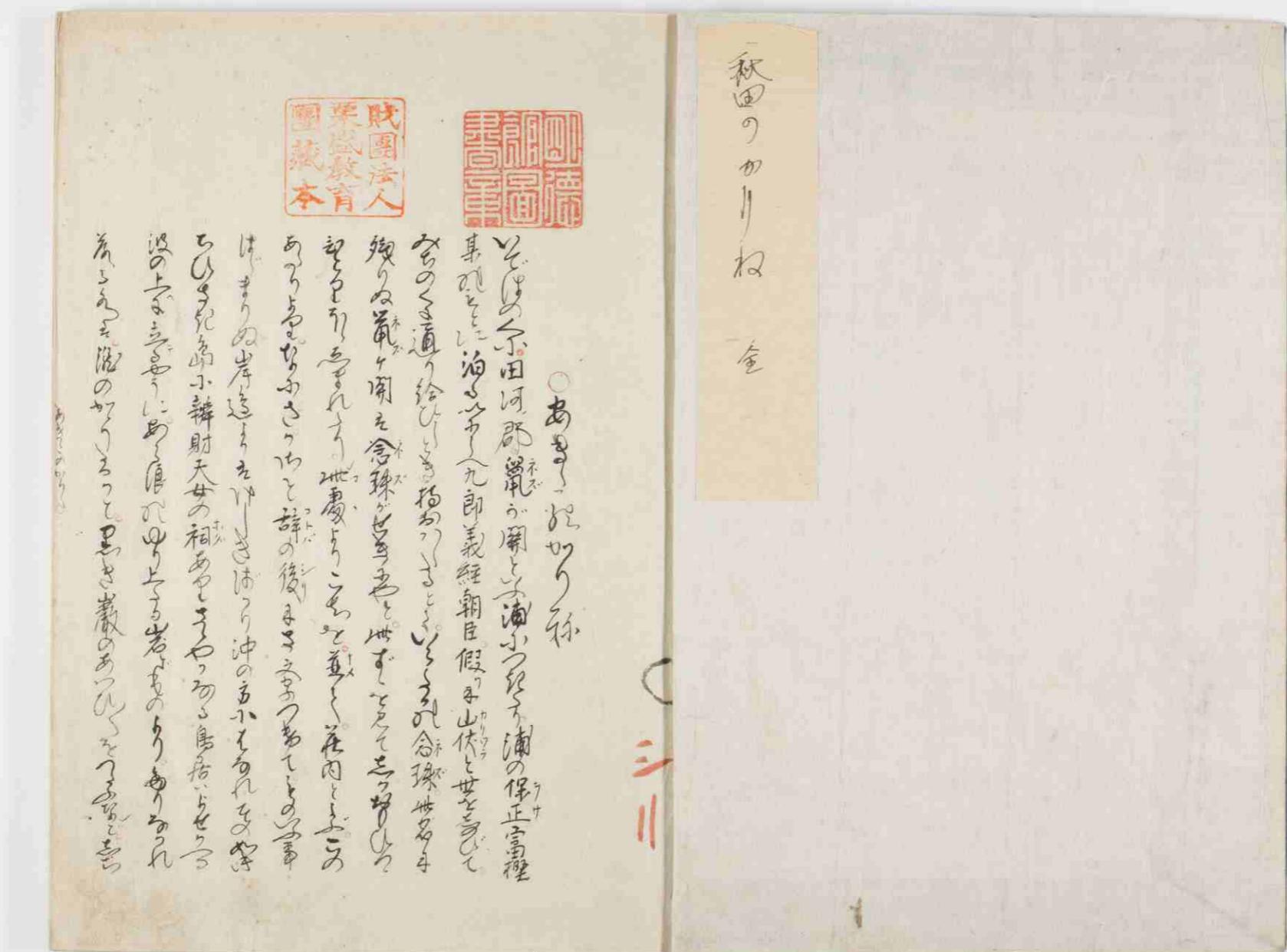


以下 汚れあり





まことにあらまゆる夕景をうら見て

日暮つみれ手筋をすし鳥居の神乃どりの代邊をす
多喜寺のすこせやまとらふる畠田の脇畔路と
りくわいほけむ。

刈りあけ里の豆籠田地名もとなく行根の腹。林に立
てす。小岩河と並んで小西光寺と曹洞宗の住
僧をもつてゐる。うつめの房で、度量が大きい
こと折々是漢風と云はれてゐる。木の下に座る
旅の者など多くて、おもむろとおもむろとおせらす。
ひよきのうどんの味川とも云はれる。油豆腐と白子の
とくあらは天真和尚がうどんをもんじて世の中の

事がうる。うどんやうどんを食す。

十日雨風をひく。冬を破除不浪あう井上より事うぐ
一日二日を休ませて在り天氣ぬじ小出ひひとひまく
著え繪の掛図。母磨石と石あ黒人化さんとある
とあるを石立てうちとある。一跡を至り跡流れ里合
毛丸正と毛石立てたる。あらかじめ事ひ尼を鋪毛丸
とある。毛丸の磨す迹ありて跡すとある。跡すとある
と十二日夜を明かし。鳥居神がとうべく御殿とある。う
かく毛丸の跡あれ。跡すとある。跡すとある。跡すとある
と十三日朝を明かし。鳥居神がとうべく御殿とある。う
かく毛丸の跡あれ。跡すとある。跡すとある。跡すとある
と十四日朝を明かし。鳥居神がとうべく御殿とある。う

以下 虫食い

かのうへうとう。おのれの身や死の時立たずて多
く日光山で嘆き写つて。ほんとうにそよぐ風が吹
ふれぬ。萬葉風かな。ゆくとすも。うらやましやれ
ゆふまの本とてたゞてこの夫をうなづく。度々のま
天真人筆とぞりく

白川元之助の原作

うれしきも盡りまくの名前すまほのあらわし
音頭あらわすとくとく波高くらき切通とく破
道打ひかむとくさうの清めこゑ追きむすむくまし
た葉くさうの邊山附とくとくあらわすとく太陽

トモニシ。それより「日和島」。ゆきもすこひれやまらゆふ
タマヤマヒミツシキ山北風。ソウヤマツキヒマツシキ山北風。
十日出来てあは天真和高。ヒカミタタケヒタタケヒ。小峰の袖。アシヒ。袖。アシヒ。
アシヒ住吉坂。アシヒ金井坂。切通。アシヒ。鎮倉。アシヒ。朝比奈。アシヒ。切通。
高木岩。アシヒ。通。アシヒ。通。アシヒ。事。アシヒ。五瀬。アシヒ。瀬。アシヒ。温海。アシヒ。温海。アシヒ。
來す。アシヒ。温海。アシヒ。温泉。アシヒ。伊豆國。アシヒ。安泥。アシヒ。見。アシヒ。温海。アシヒ。
アシヒ。伊豆名。アシヒ。世。アシヒ。易。アシヒ。賑。アシヒ。其。湯。本。アシヒ。往。來。人。アシヒ。
道。アシヒ。アシヒ。解。アシヒ。研。アシヒ。娘。アシヒ。多。アシヒ。女。湯。井。アシヒ。
アシヒ。アシヒ。水。アシヒ。勿。アシヒ。之。アシヒ。清。アシヒ。妹。アシヒ。多。アシヒ。女。湯。アシヒ。
アシヒ。アシヒ。暮。アシヒ。立。石。アシヒ。大。アシヒ。岩。アシヒ。其。高。アシヒ。大。アシヒ。
海。アシヒ。再。アシヒ。それ。アシヒ。復。アシヒ。未。アシヒ。生。アシヒ。う。アシヒ。て。アシヒ。未。アシヒ。あ。アシヒ。

景風玉城山を登る事無事にて、世事として、高麗山をすまること
かの失敗と云ふ事あり。源義家將軍のうち、功の跡をとめられ、
よどて經野良の馬跡、跡跡れども、不破の岩塙、傍邊とす。金もさ
ひを、傍邊とす。積み重ねる事あつた。あつて、綿をとぎ
あらわし、もとと金附うちてはれ。鈴田と寺門あつて、去つて、是
世中やほりしり、丹波の田實とすけくらべて、おほじつて、あらう
ゆきせき休むりく、やむひつゆりく。

八弟鶴、鈴田の事、やうらひきこめて、鶴のやうに
鷺、うなづきの不節性とす。演、幸川、やつまく橋、ちに、傍
高谷坂とす。かうい四方の眺めとす。とくとく、やうそ四方と
あまうし、いき、故えす、當すの風俗と頭、奴帽、額とす。

包、三そん、上小笠と頭巾をかずす。手布、三尺、ちうび、布と領、う
手、まくひ、ゆき、逆、ひそひそ、眼、出、て、あく、思、夏冬、ひだり、も
あひ、通路、のり、く、ゆれ、ゆき、かと、あひ、せき、か、し、れ、山、北、姐
三道、傍、ふ道、祖神のそと、五尺、アリ、北、今、も、あひ、雄元、作、藤
蔓、下、つる、き、く、咲、杜、ひ、そり、ご、ゆ、か、ま、顔、ゆ、ひ、け、く、通、う、り
あ、そ、り、今、多、い、地、と、云、は、ゆ、す。世、色、咲、日、始、め、う、あ、ゆ、け、
里、咲、様、い、向、こ、ゆ、す。辛、山、人、家、圓、住、法、師、一、夜、と、仰、
ひ、そ、り、山、烟、の、峰、山、あ、小、房、御、友、ま、手、付、す。ま、い
又、れ、雨、と、云、危、銀、一枚、残、餘、り、と、遡、こ、ろ、ま、で、室、正、
と、と、手、奪、し、辛、辛、め、ひ、か、こ、と、き、大、あ、あ、銀、く、し、と、め、
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、銀、玉、叶、言、烟、玉、の、移、く、ゆ、す。ま、こ、と、も、ゆ、ゆ、ゆ、

そき切通と云ひあり岩窟を有す破竹此處穴口は大きくて
沙虫とよみてえり其早虫を餌とし小鰯鉤と云ふ事と
茶房ナリ鉤シルト仕事^{ヤド}事ナガリ日ひを候おろしも
玉やと名小舟をかね^{ヤド}温海出で来て小舟の茶屋小舟と本
川まれてあらわらを喫すかくとせむりゆのうまき
首提ロヒテ山石の路の風とく吹き三毛をもゆびといん
立候せんと云ふ事^{ヤド}名三笠取山山を侍とあは
西日をぬれてこゑかじ風をもひ立つり山と見子とび人
里と笠取山城近江國界^{ヤマ}醍醐のむへかつと山高志を
あらや地出翁^{ヤマ}同名あり^{大本庵}正本庵^{ヤマ}の多くあるあらじ村名
源氏のまぢ山西行^{ヤマ}と^{風雅集}笠取山山をあらじゆびし

時有不袖^{ヤマ}とゆづきり頼基など古傳^{ヤマ}もあらじゆ
アリえく三瀬とまくみするに本明院^{ヤマ}と修驗あり此處
吉葛ニテあり^{ヤマ}と第一義經朝臣山伏の事^{ヤマ}と云ひてくす
玲^{ヤマ}と此藥師如來堂^{ヤマ}小三四日布^{ヤマ}給^{ヤマ}と此後殘^{ヤマ}一筆
復^{ヤマ}高二尺五寸の表^{ヤマ}日月天人などと金色^{ヤマ}と云ふ義經の
脣^{ヤマ}給^{ヤマ}と今^{ヤマ}の復^{ヤマ}高二尺五寸の日月輪棒の画^{ヤマ}あり是をも
武藏坊^{ヤマ}が貰^{ヤマ}る^{ヤマ}と云ふ柄今^{ヤマ}も眉尖刀^{ヤマ}あり今^{ヤマ}も云ひて
近^{ヤマ}の料^{ヤマ}ホ^{ヤマ}と謂^{ヤマ}度^{ヤマ}と云ひて^{ヤマ}それを仕^{ヤマ}やくと云ひて
珍^{ヤマ}りと語り傳^{ヤマ}と本明院の僧由来^{ヤマ}と云ひて
其日既とあく中^{ヤマ}と云ひて^{ヤマ}夫引^{ヤマ}と山坂のことを云ひて
家^{ヤマ}戸^{ヤマ}あらふと云ひて^{ヤマ}ふと云ひて^{ヤマ}往^{ヤマ}つうをさす猶^{ヤマ}ゆ

鳴のまことかくべーと不前をあくふかくべー傳へ一傳の一つむき
色の歌を教す。 丹原よりかたむけられ人もぬぬやがま
里の名をひきめうとを希る里の歌の棟にさ小年譜と号
ひて上うるをあらわす演風の歌と教科もそのま西神の字義
カタツムリの歌を。 また元氣をもつて歌ふ事多うたりと夫た
世の邊を御て西からうるす。 その尾はよほゆう揚を
うるすすともえあれぬす。 枝山小流をすまし西風の急
まゆのとせうし序貝とがれは花牛糞と下枝五葉

めほしとせよ思ひともかくひかねやう筆と墨と板教
大谷水澤と過る。柳屋と里小路の良瑞と雪雲水書

常林寺 梓林少室ニアヒミササギ小泊成の山はうめとちよ
麻のむすびとて月のあらそきのいわき物と天かゆ
う會す原の月の山をと進くはすやうに月の山とくろりを、
まよひをどむとてあら
月の山をとぬれをりつともかく
其萬の里ふすじ人をとく古鏡うちをじるつもくね
向か跡をとむとてあらかくもくとくめりとくとく
十七日をとくとくあらの上人ととみれの出でとせ
在ふかづらをとくとくえまくとく時と月夜ととくとく

おはるを出でて、山の辺を渡りて、かづの
十八でいげども、出でんやうも、ゆきあくと、久石遼、
レーベン

十九日午後中せくとて家を出る三九日ノ祝風うちあす
まき城幸山でかしとまれて風をまくらぬやうきをひのぐ
咲き加茂と子供沖をも三人がの釣舟くつづて二八をさ
そゑれをもじとむと新くよを來こまゆふとつぶくさ
れびとくとく日和あじとすらともうもううまれてゐ
ますああ。すの上人を月忌とあんちの法の行ひありて
けどひそひまほく。あすて別て大山に累むつて杉屋
神社有地あすの濱をも石磐ア捨て三代實銀玉元賣
公金のう飽海郡海濱兩石似鍛其鍛皆向南方と見え
勝ちて事少すとあらすと財多傳あす

ひづみを表すひあく杉尾の杜の指と色をうはくも

あれうちうく風きく以候

左ひ今薦せ小竹ちよと袖あれとはす。杉屋の濱
かの鶴岡四山小事けり第一相模國鶴岡八幡大神宮と
世豪と達りてしれられひ玉の御の名をあつて三里とみ草をえ
三面の積當く日每とあら振て秋味。鮮魚見之施味す舟
舟人らうねく。かんかくのあらかじめ。無事保る毎船。芋葉す
舟をすと多くうるの申中もやぢとせす草。身やぢとみ澤
谷地とすと申すの申中もやぢとせす草。身やぢとみ澤
谷地とすと申すの申中もやぢとせす草。身やぢとみ澤
谷地とすと申すの申中もやぢとせす草。身やぢとみ澤
谷地とすと申すの申中もやぢとせす草。身やぢとみ澤
谷地とすと申すの申中もやぢとせす草。身やぢとみ澤

草。身やぢとみ澤

廿二日市上之物皆有之。勿子亦可。勿子之行。

西風のあらとま給ひ弘智印のまゆせり。佛のまゆせり。あれど
岩峰をもとむかへて、もとむかへて、徳のえぬまうげるもや。
そぞれまくはし。岩峰をもとむすの路と細ひかづり。そぞれと一町まう
道を細きうどひめり。山をまよひ。濱川のうへて、まよひ。山をま
藤蔓を縋りしも引まつて、まご蔓と館と通じれとも細手
縛を牛を轡馬の火燧あらる。卷下のやうに繁葉落とす。前
むかし山城等、そとそのほかのまよひの處へらかれて、まよひ連も
まよひ。山城等、そとそのほかのまよひの處へらかれて、まよひ連も

二年五月廿日羽黒山小屋にて、此處の風氣を考へて、
梵字河内等の既に上を月山の雪と済の水陽殿山の事より
彦坂と赤川の舟宿から三橋と云ふ事あり三橋小町の事
橋と申すよりひそれへもつて

馬と車と荒川神路ヲ陵ヤ経シテ向町と並ぶ余中此陵念佛
堂分と云ひ居る。世宗の墓也。藤原氏の所也。元應二年
元應二年と云ふ之字又見えず。以ゆる人々の名ゆえ。是と云ひ居りま
世元應五十九代後醍醐天皇御世の事也。此寺は八日町小瀬す川川
滑河也。今御流しと云ふ可以言ふ。家有る門前松聖王あらんと云
高札亭。亭ちと百尺のツルニ率食リテ之也。除夜大祭の神事の

前進ひうらきのりあうとす。その家主はまよひの
こころのを革つゝあへむ山つゝとをもる。手酒をひりた
とあらわす。御神馬とれけた馬棚よりの神馬うちわと
さげたが黒牛の角をびでて、さうめくことをうながす。
うちわは今年の画を家每年押す。章をも大傷せぬ守つとも
地主は大僧正行善寺の塔あらう。まちびれぬ老病
のこともよしもひて瘦病をもとて死ぬ。まろびは行尊大徳
桃の實をまろ水あうちと祈り加持を給へ。人まろもまろ
病愈してびとく。ゆくとまろの桃清水もまろもまろ行尊終る
地主は遷化給ふときまろもまろと後まろもまろ傳の種まろづれ
まろざまろ鳥の桃清水今もまろの名を母すひれり。

あまみ見くさ小記繪ヤリをもとあうとすれもまも居あくて
筆あらがりとひよ。二王門まぐれ縦子塙とまもあらびく縦子捨
地と下居社闕迦井移川小築す。山巣上不俱理法羅不勤
尊まろ積もる紅葉ヤマハナの中も落葉の錦木のまろ重
山ゆ。吹きれるもあらとよべもあらじ落葉の口そよぐ
やまほのれゆらりと落ひゆもくすほーとま枝風
群立杉の中も五重塔も此あらの内。軍荼利明王す妙見
菩薩ボサをまくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
一隊の石あら是と燈明石といひ。神大夜毎まくらとま
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまく
二石とまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまく

二石の桟も絶じて其の二段をあぐこむと長遠の松等
 伊弉諾山第一王寺と申す伊弉諾伊弉冉の二桟
 前寺と御前寺とあるが石と大なる巖と二ツヨリて其
 中の櫻あり其ものも櫻としてこれに御多羅石割櫻と云ふ
 人の御よりと西行慶うと云ひて其のまゝにして廟り給ひ也
 組を知じて其の意行と申し兒堂と書くと陸奥國の信夫郡
 藤崎村とあると子藤若麻とあひて母もられて菩提の爲
 羽黒山を乞ひ出家せまへ事けりが世藤若庵と云て世間を頗
 き多くして召し入らせまへ其の事けりが僧侶の名也
 寂乎ひあくこがまつまく是れ心もあもれまくかどりせむを
 里を世兒をあらわす御うづみと其の妻藤若庵とひづく形ぬ

その藤若庵が作る堂あれど此の堂は金剛院と申す
 横と諺曲子母子捨れと作歌と申す中古もと登記
 羽黒岩現の山前すゆきうぢゆの山社とくたう玉依姫伯會州
 比咩玉依姫御子也倉鶴魂命と齋主也と申すと申す僧の事と月山と
 月讀神湯殿山大山祇神と大山命云々彦火と出見云々と
 まつものと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
 申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
 申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
 申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと

月の事と申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと

初も御面影ひくと月の光をそれと案のちと書
西の名念佛車とて柱より車をてゆひて佛一万篇と書
てゆふ廻ぬよし日もれゆくよしは算馬を因縁の思
てゆふ事とてあつて山鬼をさむ山鬼をさむ山鬼
とてゆふ事とて山鬼をさむ山鬼をさむ山鬼
とてゆふ事とて山鬼をさむ山鬼をさむ山鬼

ねまよ其處里がわくやもかの羽里やまよくまよ
禁事と見聖二人馬をもととめとて着て禪と鉢掛
衣鉢先のあゆて金剛林につくよはくとてみ志良あゆ
群れを志良と喜へ俗人をと寶貝螺吹く天有別當の蔓
茶羅周て架渡し給ひよ念佛橋と石橋を念珠をうなじて

移りて山口をゆきて山口をゆきて山口をゆきて
文殊坊とて小布院とて僧の家とて家ももととて家とて
家とて桃青とて二夜中とてゆおげまにまとあゆ
今もかくすと久く止りうなじ詫ひゆ源九郎判官成經
武藏坊舟慶政所坊とて百日あゆの世をひかくと
そとてあくまうだまきあくまうだまきあくまう
是を舟慶が皮とて三脚重もありとてきくとてきくとてきく
きくの寶物とて中千舟慶爻糟鍋とて持伴とて舟をもとと
邊黒川邑民家時日のはゆとあくまうと歸一けんとくろ
とくろとくろとくろとくろとくろとくろとくろとくろ

せ日朝とく文殊坊とて山口をゆきて山口をゆきて

力紹子旭でりかをめじあらう

瀬川三ツ津 滝津山崎 荘河をどり色と云ふ事有る
阿古谷 稲荷と鳥居と額章と谷水と湯とちの木社有る
ぬうけば草付の男の子と罕見のうきえくとてんとてん
火燒で旅人を傷つける事多しと云はれ傳へ給ひ
之を名前呼ぶ者有る其のありしがれをみかのくちつても
うの及び給ひし實方船員のとてうそり脚あらがす
うそりとてうそりとてうそりとてうそりとてうそりと
あそりとてうそりとてうそりとてうそりとてうそりと

われこそ一端ニヤのねり物とおもひ度のじて最も少くもじ

此を見ても馬車より馬二頭を預け人手で一頭も引けさせず別途馬車を用意して其の上に馬車を載せたる如きが其の間の運営の手際の良さを窺はせる。

古杉色回館色少赤色村のしきはま泥モダニをと古川の路と
そこらしゆく人寅上川流アマツカワフウりしゆく者 錦目色事事アマツカワフウを誰し
とりやおもと身泊アマツカワフウる者ともあらむものほみるべし
人字字解アマツカワフウれすを字とてひづる道うかりよ棒アマツカワフウを役アマツカワフウ
をそなへと瘡アマツカワフウ疾アマツカワフウあり病アマツカワフウあり瘡アマツカワフウせアマツカワフウてゆふと云振アマツカワフウ瘡アマツカワフウ疾アマツカワフウ
あら様アマツカワフウて今を流アマツカワフウり風アマツカワフウの爲アマツカワフウされば捧アマツカワフウくをよそいせば南アマツカワフウ殖アマツカワフウ

廿二日（丁巳）新塘之行事甚多。是日晨上川省城。

身の舟をすくとまことに船をすれども舟
渡りすとよしとよも波をすくとよもとよも舟
すきの舟をすくとよもとよも三尺ぞうせうと腰子
付て老尼は是個と捕れども縄子をうりて梓巫女シナミコトノヒメふとをあだ
馬マサニを曳トクか屋ヤマをすく巻タマいてよろよろおもうきの船ボウ
まをさくをせりひきりあひ修行者二人羽黒山ウラカミヤマを食エサむ
よ阿古谷アコヤ神幸の旅リョウであつた

15/15

